

家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティの再生に関する実践研究⑤

——数量的分析を踏まえた心理臨床的な視点から——

Practical Studies on the Revitalization of “Child-growth” Community in Families, Schools and Local Communities : V

——From the Perspective of Clinical Psychology Based on a Quantitative Analysis——

加藤美智子*, 田中 優*, 泊 真児*, 西河 正行*, 深津千賀子*,
福島 哲夫*, 古田 雅明*, 向井 敦子*, 八城 薫*

Michiko KATO, Masashi TANAKA, Shinji TOMARI, Masayuki NISHIKAWA,
Chikako FUKATSU, Tetsuo FUKUSHIMA, Masaaki FURUTA, Atsuko MUKAI, Kaoru YASHIRO

<キーワード>

子育て, 子育て, 個別性, 心理臨床学, 発達心理学, 問題解決リソース

<要 約>

本研究は、家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティの再生に関する一連の研究の第5報であり、研究①から④を踏まえて個別的であり実践的な視点を持つ心理臨床的な考察をすることを目的としている。

上記の一連の研究が、養育者の「子育て」という視点ではなく、子どもを中心とした「子育て」という観点をもって取り組んでいることから、まずこの視点の違いについて検討し、その心理臨床的意味について考察した。次に、数量的分析を踏まえて見えてきた、母親の育児規範の在り様、パートナーとの関係と母親の育児感情との関連、20代の若い母親と父親の困りごとの内容と問題解決の様子、自由記述から見えてくる少数派の人々（離婚家庭・シングルマザー・パートナーの関係が期待できない状況の人々）の声、について検討した。そして、実際の相談事例を通して子育てに必要な環境としての母親の子育てについて考察した。

(本研究は、「家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティの再生に関する実践研究」のテーマで、大妻女子大学人間生活文化研究所の共同研究プロジェクトによる平成20年度、21年度の研究助成を受けている。)

1. 問題

(1) 「子育て」と「子育て」

大妻女子大学人間生活文化研究所の共同研究プロジェクトによる『家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティの再生に関する実践研究』では、「子育て」という視点ではなく、子どもを中心とした「子育て」という観点から、子どもが育つ人的・物的・社会的環境づくりに焦点を当てた「子育て」コミュニティの再生が必要である、と考えている(古田・加藤・田中ら, 印刷中)⁽¹⁾。この二つの視点は、主体が親にあるのか、子どもにあるのかに違いがある。そして、この「子育て」という考え方は、子どもを取り巻く環境の変化に対応した子どもの育ちを、地域で支援しようという理念として使われているようである。長野県の子育ちに関する活動報告書(長野県幼児教育連絡会議資料, 2007)⁽²⁾によると、子どもの体力・運動能力の低下, 自然・社会体験の不足, 睡眠・食育の問題, メディアとの過剰な接触, コミュニケーション能力の低下などに対応するために、家庭環境づくり, 子育て家庭の仲間づくり, 地域の人々が参加する子育て支援, 教員・保育士の資質向上, 地域施設の連携, 人と関わる体験の充実, 自然体験・社会体験の充実, 言葉や表現力, 感性を養う活動の充実, きめ細やかな保育の推進などが計画されており, 地域活動理念として「子育て」という言葉が使用されていることが理解される。子育て支援というときには, 子育てをしている親を支援するという観点が強くなるであろうが, 子育てプロジェクトとなると, 子どもが育つことに必要な環境づくりという観点が強くなり, より広く大きな視野をもって考えられる。子育てプロジェクトに子育て支援は含まれることになるだろう。

「子育て」と「子育て」について考えを進める上で, もう一つ重要な観点があるように思われる。それは, 心理臨床学的な観点である。心理臨床学とは, 心理的な問題やその問題を抱えた人をどのように理解し, どのような働きかけをしたらよいのかを臨床実践を通して試み, その実践に伴う臨

床的知見を蓄積・整理・体系化して, 人間に関する新しい認識を獲得しようとするものと定義されている(氏原・亀口・成田ら共編, 2006)⁽³⁾。そして, 心理臨床学は, 臨床実践において, 一つ一つの事例や一人ひとりの心理や状況という個別性を重要視している。

「子育て」の主体である子どもが育つ家庭の環境は, 主体である子どもを育てている(「子育て」をしている)親によって作られ, 主体である子どもの育ちに影響を与える。その意味で, 子育てをしている親が困っているという状況は, 子育て環境にとっての重要な一要因となり, 子どもの育ちに影響することになる。この時, その子育てをする親自身の個別の問題(経済, 健康, 人間関係, 困りごと, 心理的混乱など)が大きすぎると, いわゆる親が“情緒不安定”や“感情的になる”と言われる現象を引き起こし, 子どもの育ちに影響を与えることになる。子育ての場面で, 親自身の問題に起因する感情によって子どもの在り様を歪めてとらえたり, 子どもに対応できなくなったり, 子どもに対応するのではなく自分の感情をただ子どもにぶつけているだけになったりする。そこには, 主体である子どもの姿が心理的意味において不在になっていると考えられる。子育てをしている親は存在するが, 子育ての対象でありかつ子育ての主体である子どもが心理的に存在していないということになるであろう。主体である子どもの心理的存在の回復や子どもの育ちを促進する環境整備の一つを, 心理臨床が担っていると考えられることができるであろう。

(2) 心理面接と主体

心理臨床の現場では, 多くの親(養育者)の子育て相談を受けている。個別性を重視する心理面接では, 来談されている人を面接の主体とするということは原則であり, 今そこに座っている親の話や気持ちに沿って話を聴いていく。「子育て」について相談に来ている親は, 「子育て」の主体でありかつ面接の主体である。しかし, 子育ての相談の場合, 主体である親の存在だけではなく, 子育ての対象である子どもが重要な存在として面

接内に存在することに特徴がある。

面接の主体である親の、子育てに関する困っている事象や心配や不安やイライラなどの気持ちに沿ってカウンセラーは話を聴きながら、その話の内容から子どもの行動や心の在り様や発達について見立て、客観的に、そして時には子どもの心を代弁するように、臨床心理学や発達心理学の専門知識を用いて子どもの育ちを理解し、その見立てや理解を親に説明する。カウンセラーは常に親とカウンセラーの間に子どもの存在をイメージとして介在させる。古田・中田・深津（印刷中）⁽⁴⁾が述べているように、子育て相談は母と子どもの両方を別々のカウンセラーが並行して行うことが多いので、面接前後の子どもの様子を直接観察できることもある。しかし、子どもを同伴しないで親だけの来室による子育て相談もあるので、カウンセラーが子どもの様子を直接には全く観察できない場合もある。もちろん日常生活における子どもの様子はいずれにしても親の話からしか得られない。親との面接場面において、実際には面接室に不在である子どもが、イメージとしてしっかり存在するというこの現象は、子育て相談が子どもの育ちへの支援であり、子どもの育ち環境を整え子どもの育ちを促進することを最終的な目的としていることから生じている、と考察される。

実際の面接では、親の気持ちに沿って話を聴くことと子どもの在り様を見立てることを繰り返しながら、この子どもに対してこの親のどのような関わりがどのように影響しているか、そして、この親に対してこの子どものどのような関わりがどのように影響しているのかについてじっくりと話し合うことになる。親子の相互交流のどのようなところがボタンの掛け違いになっているのか、子どもは親に何を期待し、親は子どもに何を期待しているのか、そして、この親子にとってどのような環境がより適切なのか、などについても親とカウンセラーが共に考えていくことになる。子どもが遊戯療法で遊びながら表現している思いについて、子ども担当のカウンセラーと親担当のカウンセラーで話し合い、そこからの気づきを親面接に活かしていくこともある。カウンセラーは、時に

は夫の代役になり、時には友達や先輩の代役になり、子どもの代役になるなどの役割を担っていると感じることもある。しかし、カウンセラーが中立的で専門的な姿勢を崩さず、子どもの育ち環境を整え、子育て環境としての家庭に、子どもが主体としてしっかりと復活することを目指すのである。このようなカウンセリングプロセスの中で、子育てをする親が、自分自身の問題についても語りたくなったり、実際に語ってしまうことも特別なことではない。子育てをする親としての問題と親自身の問題は簡単には切り離せない。ここにも子育て相談の難しさがある。

2. 子育てに必要な環境としての子育てについて

一連の『家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティの再生に関する実践研究』における数量的分析を補足する意味で、個別の考えや状況に焦点を当てて考察をしていく。

(1) 困りごとについて

子育てにおける困りごとは、「子どもの病気・怪我」が母親（67.5%）も父親も（62.8%）一番の困りごとであった。「子どもの育て方」については、母親（66.3%）が父親（53.5%）よりも多く困りごとと感じている。子育て中の親にとってこれらの問題が最も恐れることであることは納得するところである。このとき、問題の解決に向けて、母親は「パートナー（46.6%）」「親・きょうだい（17.8%）」「友人やママ友（14.7%）」「専門家（12.9%）」に相談し、父親は「パートナー（62.8%）」「専門家（10.1%）」「親・きょうだい（6.2%）」「友人やママ友（2.3%）」に相談している（古田・加藤・田中ら、印刷中）⁽¹⁾。この場合、専門家とは、近くの病院の医師や看護師や保健所・教育現場（保育園や幼稚園や塾やお稽古事）の先生を含んでいるであろう。しかし、子どもの育て方や発育などについての心理発達の専門家が含まれているかどうかは、今回の結果からは見えてこない。

(2) 母親の育児規範の在り様について

田中・加藤・泊ら (印刷中)⁽⁵⁾によると、父母の育児規範は『奉仕的育児観』と『親の責任感』の2因子構造であった。『奉仕的育児観』因子は、「子どものためになるなら、どんなことでもしてあげるべきだと思う」「子どものためなら、自分のことは当然ガマンすべきだと思う」「子どもをよりよく育てるために、親は正しい知識を身に付けるべきである」などの項目から構成されており、また、『親の責任感』因子は、「子どもが3歳くらいまでの幼い時期は、母親は子育てに専念すべきだと思う」「子どもがよく育つかどうかは、すべて親の責任だと思う」などから構成されていた。

この2因子について親の年齢との関係で見ると、奉仕的育児観で年齢層の主効果が得られ ($F(2, 256)=6.113, p<.01$), 40代 ($M=2.6, SD=0.55$) よりも20代 ($M=3.0, SD=0.38$) や30代 ($M=2.9, SD=0.59$) の方が高くなっている。20代、30代は「～するべき」という育児規範に対して肯定的であるが、40代は中庸的と言える。しかも、「親の責任感」は母親と父親で有意差はないが、「奉仕的育児観」は父親 ($M=3.0, SD=0.65$) が母親 ($M=2.8, SD=0.50$) より有意に高いのである (向井・加藤・田中ら, 印刷中)⁽⁶⁾。

このような結果から考察されることは、特に20代・30代の若い親は「～するべき」という育児規範が強く、母親より父親の方に奉仕的に育児を行うという規範傾向が強いという結果である。その中でも、個人的傾向として規範意識がより強い母親にとっては、育児が非常に厳しい課題となり、育児の先輩世代や自分の親世代との間で規範意識の違いを感じて葛藤する可能性があるだろうと考えられる。しかも、若い母親は自分の育児規範の強さに加えて、パートナーからも「～するべき」という規範意識を強化される可能性があり、育児規範意識の強い傾向のある母親は、自分自身とパートナーの二重に強化された育児規範によって、心理的に追い込まれていくことが他の世代に比べて多いのではないかと予測できる。

(3) 母親の育児感情について

育児感情は、『感情統制不全感』と『自己疎外感』『育児不安感』『育児幸福感』の4因子構造になっていた。『感情統制不全感』因子は、「親として子どもに対する優しさが足りないのではないかと思う」「子どもの相手をするのが煩わしいと感じることがある」「こころの底では子どもがかわいくないときがある」「子育てでイライラすることが多い」「子どもを叱るとき、感情を抑えることができない」「子育てが思い通りにならない」の項目から構成されており、『自己疎外感』因子は、「毎日子どもの相手ばかりしていると、世間から取り残されそうで不安である」「子育てのように、はっきりした答えがないようなことに取り組むのは苦手だ」「子育て中にふと“自分は何のために生きているのだろうか”とむなしくなる」「思い通りにできないような状況だと、不安になる」「子どもに振り回されてしまう」「子育てについて誰に(どこに)聞けばよいかわからないので不安である」の項目から構成されており、『育児不安感』因子は、「私の育て方は、これでよいのかと気になる」「子どもが順調に育っているのかどうか不安になる」「ここまでのところ子育てはうまくいっていると思う(逆転項目)」の項目から構成されており、『育児幸福感』因子は、「子どもを持ったことで人生が豊かになった気がする」「子どもを育てることで、自分も育っていると感じる」の項目から構成されていた (田中・加藤・泊ら, 印刷中)⁽⁵⁾。

「育児幸福感」については、母親 ($M=3.4, SD=0.53$) が父親 ($M=3.3, SD=0.58$) よりやや高い傾向 ($F(1, 284)=3.755, p<.10$) があり、自己疎外感も、母親 ($M=2.2, SD=.064$) の方が父親 ($M=1.8, SD=0.52$) よりも有意に高く ($F(1, 282)=40.098, p<.001$), 感情統制不全感も、母親 ($M=2.1, SD=0.59$) が父親 ($M=1.7, SD=0.45$) よりも有意に高かった ($F(1, 279)=37.699, p<.001$)。さらに、母親は、パートナーとの関係認知がポジティブだと育児幸福感が高くなるが、ネガティブだと感情統制不全感、育児不安感が高くなる (向井・加藤・田中ら, 印刷中)⁽⁶⁾ 結果であった。

このような結果から、パートナーとの関係があまり良くなかったり、パートナーの仕事が忙しく子育ての協力があまり得られなかったり、社会参加意識の高い女性が子育てのために仕事をしていたり、長時間子どもと母子だけで過ごさなければならない場合は、母親の自己疎外感や感情統制不全感や育児不安感が強くなっていると予想される。そして、そこに育児規範意識が加わると心理的健康が阻害されるほどの状況も起こりえるであろう。また、生活環境の中で、パートナーとの関係が良好で、育児幸福感が高く、人生の豊かさを感じている母親たちと付き合い合わせなければならないことを想定すると、それらの幸せそうな母親の影響によって自分の疎外感や不全感や不安感をより強くし、ここに誰かに話をするのが苦手であるといったパーソナリティ要因が加わるとすると、本当に心配な状況を呈することは想像に難くないであろう。

(4) 父母の困りごとの内容と問題解決の様子

1, 2歳児を持つ育児経験のない20代の母親について、「子どもの育て方」を困りごとと感じている場合、本・雑誌等の書籍類やネットの利用度が高く、親・きょうだいやパートナーへの相談度も高いことが示唆された。一方、自分の「心身の問題」や「ママ友等の対人関係」を困りごとと感じている場合、育児不安感や自己疎外感が高く、親・きょうだいを解決リソースとして問題に対処しようとしているものと考えられる。また、「子どもの育ち」や「経済的問題」など複数の困りごとを抱えている場合、パートナーとの関係が不良であるがゆえに、育児幸福感の低さや感情統制不全感が高くなっていると考えられる(泊・加藤・田中ら, 印刷中)⁽⁷⁾。

このように、子どもの育て方はさまざまな情報を利用することで対処も可能になるかもしれないが、心身の問題やママ友等の対人関係の問題は、友だちではなく、親・きょうだいしか解決リソースにならないようなので、親・きょうだいと同居していたり近隣に住んでいる場合は別として、その問題についてオープンにされることなく心のう

ちにしまいこんで、毎日の子育てやママ友付き合いが行われていることになる。この状況のストレスが多大なものであることは推測に難くない。

父親も、1, 2歳児を持つ育児経験のない20代の父親は、「子どもの病気・怪我」と「経済的問題」を1番の困りごとと感じているが、パートナーや友人・パパ友、親・きょうだいへの相談度が高く、そうした対人的な問題解決リソースへの信頼度が高いゆえに、父親は、育児不安感や感情統制不全感が低く、逆に育児幸福感が高いことが示唆された。また、父親の方が困りごとの内容に関らず、多くの場合仕事の時間があることで気分転換や育児からの開放感が味わえることで、育児に対して心理的距離感が生まれるので対処がうまくできる可能性が高いとも考えられる。ゆえに、深刻な事態に陥る危険性は母親より少ないと言えるのではないだろうか。

3. 自由記述に見られる子育ての声

今回の一連の研究調査では、当然のことながらパートナーの存在が子育てには大きな環境要因であることがクローズアップされた。そして、この調査に協力していただいた方の少数派である、何らかの理由でパートナーを頼りに出来ない方、シングルマザーの方、離婚によって一人親で子育てを行っておられる方々の自由記述には、子育ての大変さを感じ取れた。また、今回の調査を行った地域では、パートナーとの関係が良好であり、子育てを楽しみ、子育てに充実感を感じておられる人たちが多かったが、そのような地域の中で、肩身が狭く自己卑下的に生活しておられる印象であった。「パートナーのアンケートは提出できません」「シングルマザーなので1通のみの提出になります」「母子家庭では、項目に当てはまらないものがあり、全部は回答できませんでした」「パートナーはいません。悲観的な意見になってしまいます。子どもは悪くないのに。」など、あえて記載したという意志が感じられるほどであった。調査そのものには、上記のような家庭についての配慮はしていたのではあるが、やはり充分で

はなかったと反省すべき点であった。一人で子どもを育てなければならぬ場合、そこには多くの人知れずの苦労があることが予測される。前述した数量的分析において、母親は、パートナーとの関係認知がポジティブだと育児幸福感が高くなるが、ネガティブだと感情統制不全感、育児不安感が強くなる(向井・加藤・田中ら, 印刷中)⁽⁶⁾との結果からも、パートナーとの関係が全く期待できない場合は、特に感情統制不全感、育児不安感は深刻になるであろうと考察される。

また、「日頃子育てに向きあっていないかを問われているようで、とても答えにくかった」「日常生活が忙しいので、気にしないことが多いなと感じた」など、子育てをしながら子育てにともなういろいろなことをいちいち考えていられない現状があり、子育てに向きあうということは、子育て中にはなかなか大変なことであると理解された。

20代・30代の若い親にとって、毎日の忙しい生活のなかで、それぞれの心配や不安や不全感などを安心して気軽に話し合い、じっくり子育てについて考え、反省し、専門的な確かな知識を得て、自己疎外感や自己卑下感を少なくし、子育て充実感や人生の幸福感を感じられるようにできる環境があるならば、それだけで子育て環境は良好になり、子育て環境も良好になると考えるのは安易すぎるだろうか。そのような環境はどのようにして実現可能であろうか。

4. 心理臨床の視点から

(1) 心理臨床における親面接

以上の調査結果と考察から、パートナーの存在、あるいはパートナーとの関係性が育児感情の感情統制不全感、育児不安感などに大きな影響を与えていることが理解された。この視点についてより考察をすすめる。

子育て相談の多くは母親であることもあるので、このパートナーの存在や関係が感情統制不全感や育児不安感などにどのような影響を与えるのかについてより具体的に検討するために実際の心理面

接を取り上げてみたい。若い女性や母親の、結婚や出産や子育てについての考えや思いにまで視点を広げて考察する。取り上げる事例については、プライバシーを保護するため、筆者が関係する複数の相談室で行った面接事例を基にして、その本質を損なわないように考慮しながら改変した事例であることをお断りしておく。前掲した心理臨床学の定義とも関連することであるが、一つ一つの面接は独立した特殊性を持つものであるが、複数の面接を俯瞰的に考察するとそこに普遍的共通性と個別的特殊性という2つの要因が見えてくると考えられるので、ここでは5つの事例を通して考えることにする。

子育てをする状況になる前に、女性はパートナーを決定し母親になるための心の準備をするという課題があるということが考察された事例について紹介する。

20代後半のAさんは、有能な働く女性であった。美しく知的な彼女は多くの男性から好かれていた。そして、ある男性の子どもを妊娠する事態が発生した。相手の男性は妊娠をとても喜んでくれたが、彼女は自分の家族に妊娠のことを話せず、「授かった子どもの命を殺せない」「大切な命は守らなければならない」と思いながらも、どうしても出産を躊躇う気持ちがあることに気づき相談に訪れた。妊娠についてのどのような気持ちや気がかりがあるのかを話し合っていくと、まず、自分の母親が自分を心配してのことではあるが相手の男性との交際について反対であること、子どもを産むということは仕事に支障がでるだろうと思うことが話された。そして、自分が子どもを育てるという現実感がないということと、子どもが嫌いなわけでもないが子どもが欲しいとも思っていないことに気づき黙りこんでしまった。そして、「今の私は母親になってはいけません」と悲しそうにため息をついていた。その後の数回の面接で、自分は母親に賛同されないと安心して行動できないこと、母親がきっと賛成するだろうと思える男性を好きになるが、実際に付き合う男性は母親が反対するだろうと分かっているような人であるということに気づくに至った。医学的に

ぎりぎりの時期まで考えに考えて、最終的には中絶の決意をすることになった。

次に紹介する30代のBさんは、女性の出産年齢の上限を考えると、早く「子どもが欲しい」と感じていた。しかし、一人の男性と家庭を築き、一緒に子どもを育てるという考えは不思議となかった。相談に来た目的は、その人の子どもが欲しいのに関係がうまくいかないという事態をなんとかしたいということであった。BさんもAさんと同じように働く女性であった。「子どもが欲しい」のは「自分の分身が欲しい」からであり、「彼のことは少しも好きではない」と沈着冷静に語り続けた。好きではないにもかかわらず彼女は男性に献身的に尽くし続けていた。そのうちに疲れ果ててしまい、仕事に支障が出てくるほど健康を害してしまった。彼女は、両親が離婚していて、母親のような人生だけは送りたいと強く思っていることが次第に明らかになり、感情的な「好き」ということは安易に思っただけでいけないと強い禁止令が自分の心に出ていたことが分かった。しかし、一人で生きていくことは寂しく、かといって男性を「好き」とは感じるべきではないし、離婚という結果になる可能性のある結婚にも踏み切れず、「子どもが欲しい」と考えるようになった心の過程が理解されてきた。

次に、Cさんの事例である。Cさんは子どもを持つという心構えが出来ないままに子どもを持った20代の女性であった。彼女は、自分自身の両親からは経済的には何んも自由なく育てられたが、心理的に愛情をもらわなかったと感じていた。親元を離れてからは、孤独に生きていたという。そして、親にも反抗していたので経済的支援も受けることができなかった。アルバイト生活を長く続けていたが生活は大変であった。そして、ようやく出会った男性と幸せな生活を始められると思っていたにも関わらず、男性は結婚も出産も望まなかったのである。それでも彼女は何も迷うことなく子どもを持った。彼女は福祉制度を使いながら必死に子どもを育てていたが、どうしても心から子どもを抱くことができず、どうしても不自然に子どもを叱ってしまった。そのことを反省すると、

今度はべたべたに甘いお母さんになっていた。子どもの情緒は不安定になり、乱暴な子と言われ、子育てが大変になってしまった。一人で子どもを育てていて、「誰にも本当の相談ができなくて」「ちょっと友人に話しても自分が悪いといわれ」「自分が悪いと分かっているけど気づくと子どもを殴ったりしている」と泣きながら話すのであった。

Cさんの場合、両親との関係の不在、パートナー不在によって孤独で大変な生活を送っており、いろいろなことを相談できる場としてカウンセリングは大きな支えになっていた。経済状況というものの重要さと母親自身の内的親子関係に收拾がつかないことがいかに子育てに大きく影響することか、また、誰にも頼ることができない状況で子どもを育てることがいかに大変で辛いことなのか、さらには、福祉制度を利用することで生じる自己卑下感がいかに大きいかについても再認識した面接であった。

Dさんは、相談開始当時20代後半で、二人の子どものも母親であった。Dさんは、学生の頃から、どこか人と違う、うまく人付き合いが出来ないと悩み、孤独感も感じていた。大学卒業後すぐに結婚した。結婚しても一日中寝ていることが多く、食事も作れなかった。感情が爆発することもあったが、夫は彼女を理解し、不満には思わず、家事の手伝いもしてくれる優しい人であった。そして、二人の子どもを授かり、子どもが乳児の間は、孤独感も薄らぎ穏やかに生活していた。しかし、上の子どもが3歳になる頃から、自分の子どもが健康に育っているのか心配になり、また、子どもとどのように接してよいか分からなくなってきた。子ども相談に行ったが子どもに問題はないと言われた。Dさんは、頭で一生懸命考えて、子どものためにりっぱに親の役目を果たさなければと思っていた。お稽古事も必死にさせてしまい、子どもがお稽古を嫌がっていることも何となく分かり、練習効果が上がらないことも理解し、お稽古事の先生がイライラしてくると申し訳なく思い、自分はどうしたらよいか分からなくなってしまうと話した。子どもを感情的に叱ってはいけないと思えば思うほど強く強い声の調子になっていた。

子どもは、「お稽古するのいや！って言うのですよね」と不思議そうに語った。Dさんには、親に自分を主張するという経験がなかったのである。カウンセラーは、その子どもの言動の健康さを強調して伝え、よく分からなくても、自分の気持ちを抑えてでも、子どもの言動を理解しようとしているDさんの努力を支持した。そして、子どもの言動が不思議ではあったが、どこか「それでいいのかもしれない」と思っていたDさんであった。Dさんは、カウンセリングの中でよく「普通はどうするのですかね」「普通は、こうするんでしょうけれど」と「普通」という言葉を使った。どこかに普通の正しい答えがあって、その通りにしなければならないと考えているようであった。

最後にEさんの事例である。相談当時20代の女性で、二人の子どもの母親で、専業主婦であった。子育てに不安になっての相談であったが、二児のお母さんであるとは思えない最新の装いであった。夫は仕事が忙しく、夫の健康のことを考えると子育てについて夫に相談できないでいた。ママ友の付き合いが多くなっていて、悩むことも多かった。ママ友から子どもの行動について指摘されると、その言葉が後になって気になり始め、いつまでもいつまでも考えてしまって眠れなかった。ママ友の子どもを預かることも多いが、自分が預かってもらうよりも預かることのほうが多いので理不尽とは思っても断ることができなかった。また、多くの母親は、自分の子どものことを褒めて自慢するけれども、Eさんは自分の子どもを褒めたり自慢するなどということは考えられなかった。気がつく、「うちの子はダメなの」などと言っていた。子どもに悪かったなあと思うし、本当はダメとは思っていないのに何故そのように言うてしまうのかが分からなかった。相談するようになって、自分が親と遊びたかったことを思い出し少し子どもと遊ぶことが多くなった。子どもは楽しそうに遊んでいる。しかし、最近、べたべたしてくることが多くて、それに困り始めていた。カウンセラーが「お母さんにべたべたしてくるということは、子どもの成長過程でとても好ましい変化です。そうやって、お母さんとの信頼感を確

かめていると思いますよ」と話すと、本当に驚いていた。子どもが成長していく過程で見られる行動についてのちょっとした知識が、Eさんには驚きであり安心になったようであった。

これらの5つの事例は、①子どもを持つとうとするときや子どもを育てているとき、自分自身の問題が浮き彫りになることがあるということ、②子どもを育てるときに出会う人々との付き合いが、想像以上に心労になるということ、③子育てに関する心理的な知識は、母親にとって大きな支えになるということ、④子どもは母親の戸惑いや不安を受け入れながら充分健康に育っていくことができること、⑤母親も子どももパートナー（父親）の協力や安定感がとても助けになるということ、⑥母親が感じているほどには子どもに問題はなく、子どもが母親の大変さを無意識に察知して行動をとることがあること、⑦忙しい日常のなかで、カウンセリングの時間が自分のためにあるということがゆとりになって母親の気持ちにもゆとりが生まれること、⑧パートナーの不在が感情統制不全感や育児不安に大きな影響を与えること、⑨働くことが育児の問題との関連で女性にとって大きな問題であること、などを教えてくれるものであった。相談事例であるという点から、不安や悩みがかなり強い例であるということもできるが、今回の調査対象の中にもかなりの数で含まれている「子育てに悩んでいる母親」の典型的な部分を含んでいるであろうと推測される。今回の数量的調査を補うという意味からも、支援という視点を具体化させるという意味でも重要な事例であると思われる。

一人の子どもが育つためには、このような人と人との対話をとおした知恵の出し合いや、心理発達の専門知識を用いて子どもの言動を理解し合うことが役に立つことが多い。特に、子育てにおいて日常的に困っているとの認識がない場合にも、子どもの心の発達には、信頼出来る他者と話し合うことが有意義であると思われる。自分の子どもは自分にしか理解できないという親の自尊感情は子育てにとって大切なことである。しかし、否、だからこそ、その自分の子どもについての心配ご

とを他者に話すことは思いのほか難しいことになる。自分の親としての自尊感情と闘わなければならないし、他者からの批判にたいする不安とも向きあわなければならない。それでも、一人よがりな子育てにならないためにも、身近な人であっても全く利害関係のない他者であっても、子育てについて話をするには、子育て環境にとって大きな影響を与えることと考えられる。

5. 臨床的援助としての地域活動と大妻女子大学心理相談センター

今回の考察から、「～するべき」という育児規範が強い若い世代で、パートナーとの関係がよくない場合、パートナーがいなくて一人で子育てをしている場合、感情統制不全感や育児不安感が強い状況にある母親の子育て環境が、他の世代に比べて厳しい状況に置かれやすいことが推測された。また、心身の問題やママ友等の対人関係の問題を抱えてしまうと、さらに子育て状況は厳しくなるであろうと予測され、適切な問題解決の時期を逃すと健康を害してしまう恐れもあるだろうと考えられた。古田・加藤・田中ら（印刷中）⁽¹⁾は、ヒアリングの結果、子育て文化伝承の困難さ、伝承が不十分なため子育て情報をマニュアルに求める親が多いのではないかと指摘している。調査結果から、子育てにおける問題解決に、父母ともに有意差なく「パートナー」を選んでおり、実際にも問題解決リソースとして、親・きょうだい・パートナーが重要であった。しかし、親世代とは育児規範についての意識が異なり、若い世代ほど育児を厳しく捉えているため、親世代に相談してもなかなか受け入れられたと感じるのは難しいであろう。そのため、同じ世代であるパートナーの存在意義が大きくなるのであるが、パートナーとの関係がネガティブであったり、パートナーがいなかった場合は、問題解決のリソースをどこに得たらよいか問題となり、周囲の人間関係から距離のある専門家との相談が意味をもってくると考えられよう。

大妻女子大学にある心理相談センターとその地

域援助活動についての詳細は、古田・中田・深津（印刷中）⁽⁴⁾を参照していただきたいが、ここにその概略を紹介する。

大妻女子大学心理相談センターは、臨床心理士の養成機関として臨床心理学を専攻する大学院生の教育・研修機能を有しながら、子どもから大人までを対象とした相談を受けている。スタッフは、臨床心理学や発達心理学を専門とする大学教員、非常勤の臨床心理士、臨床心理士資格を持つ相談協力員と臨床心理士候補生の研究員、大学院実習生から構成されている。相談は大学院実習生も行うが、大学教員の指導を受けながら相談を進めることになっている。相談内容はさまざまであるが、子育ての問題は全相談の43%と最も多い。子育てについての親の相談と、子どもの問題解決にむけての遊戯療法とが別々に、母子並行で行われることもある。子どもの相談内容については、「発達障害・発達の偏り」「不登校・ひきこもり」「チック・緘黙」などがあり、親面接の内容としては子どもの相談内容にまつわるもののほか、夜尿や吃音、子どもが可愛く思えない、子どもの接し方がわからないことなどが相談される。

大学院生の訓練機関でもあるので、相談に訪れる母親にとっては自分より年下の独身女性が相談員であるということから相談し難いこともあると予想されるが、心理臨床の専門家を目指す若い院生の可能性と真摯な態度と臨床心理家チームの協働によって、親御さんの相談に対応できていると思われる。また、大学の施設であり訓練機関であるからこそ、面接料金が民間の相談機関に比べて格段の安さであり、子育て中の方々にも利用しやすいだろう。

大妻女子大学心理相談センターは、自主的に来談される方々の相談を受けているが、この活動との連携で子育ての地域支援と大学のリソースを繋げる活動が今後発展する可能性は考えられるであろう。

おわりに

もう少し気軽に、日常場面に近い場面において

子育て中の親と心理臨床家が談笑し、親子の相互交流やコミュニケーションの齟齬や修復について、第3者的な視点を交えながら話題にしたり、親の見方や親の発達（どのような親になっていくか、どのような中年期・老年期をおくるのかなど）についてや、子どもの見方や子どもの発達について話し合う場の設定が、大学と地域との協働によって可能になることもあるだろう。また、若い学生と子どもとの関わりを持つことが、子どもの育ちを促進し、子育て予備軍の若い学生の心理的準備を促進することになるとも考えられよう。いずれも人手がいることであり簡単に実現できることではないかもしれない。

参考・引用文献

- (1) 古田雅明・加藤美智子・田中優・泊真児・西河正行・深津千賀子・福島哲夫・向井敦子・八城薫（印刷中）. 家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティ再生に関する実践研究①—調査データの基礎的分析—大妻女子大学人間関係学部 人間関係学研究, 11
- (2) 長野県幼児教育連絡会議 0歳からの信州子育てのためにⅡ 親育ちに向けた提言（2007）. 第843回長野県教育委員会定例会資料
- (3) 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕共編（2006）. 心理臨床大事典（改訂版） 培風館
- (4) 古田雅明・中田香織・深津千賀子（印刷中）. 多摩地域における臨床心理士の子育て支援—大妻女子大学心理相談センターの心理相談活動から—多摩ニュータウン研究 12
- (5) 田中優・加藤美智子・泊真児・西河正行・深津千賀子・福島哲夫・古田雅明・向井敦子・八城薫（印刷中）. 家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティの再生に関する実践研究②—育児感情を規定する育児規範とパートナーとの関係認知について—

大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究11

- (6) 向井敦子・加藤美智子・田中優・泊真児・西河正行・深津千賀子・福島哲夫・古田雅明・八城薫（印刷中）. 家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティの再生に関する実践研究③—子育てを取り巻く環境的要因と父母の育児感情・育児規範・パートナーとの関係認知との関連について—大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究11
- (7) 泊真児・加藤美智子・田中優・西河正行・深津千賀子・福島哲夫・古田雅明・向井敦子・八城薫（印刷中）. 家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティの再生に関する実践研究④—数量化Ⅲ類による育児に關係するお困り事と解決リソースの關係の分析—大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究11

謝辞

本調査に先立ち、インタビューにご協力くださった専門家の先生方に感謝申し上げます。また、調査の取りまとめにご協力くださった保育園のスタッフの方々、ならびに、子育てでお忙しい中、調査にご回答くださいました多くの方々に感謝申し上げます。

最後に、面接事例をまとめるにあたり多くの貴重なお話を参考にさせていただきました。面接で出会った沢山の女性の方々に感謝申し上げますとともに、お元氣にお過ごしであることをお祈り申し上げます。